



『研究論叢』創刊の頃

森田, 満夫

(Citation)

研究論叢, 20:8-10

(Issue Date)

2014-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81008680>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008680>



『研究論叢』 創刊の頃

森田 満夫
(立教大学文学部教授)

1993（平成5）年に、神戸大学大学院教育学研究科教育過程論・教育計画論研究室院生紀要として、『研究論叢』が創刊された。この度、第20号を迎えると伺い、創刊当時を知るひとりとして、感慨深いものがある。

創刊時に、平原春好先生（当時、神戸大学教育学部長、教育学研究科長）は、この『研究論叢』の意義と期待について述べている。

「わが国の教育系大学院のなかで、博士課程をもつ先発の大学院を別にすれば、院生の手による研究紀要をもっている大学院はどれくらいあるのだろうか。後発の大学院は、それが2年制の修士課程だけであり、大学院としての伝統が形成され継受されにくい面をもち、また、研究者育成を主たる目的としない新構想の大学院として出発したいきさつもあって、

大学院のなかに研究的雰囲気醸成されにくい要因がないわけではない。しかし私は、旧制的大学院でなくても、大学院は単なる教授＝学習の場ではなく、院生が自分でテーマをみつけ、掘り下げ、成果をまとめる場でなければならないと思っている。この点からすると、この『研究論叢』は前進のための格好の媒体だといえることができ、『研究論叢』の創刊が本研究科の内部に革新の一石を投ずるとともに、他大学の教育系大学院の院生諸君との研究交流のよいきっかけになることを願ってやまない。」(『研究論叢』創刊に寄せて)『研究論叢』創刊号、1993年)

この後発大学院としての大学院教育学研究科(修士課程、1981年発足)が、総合人間科学研究科(修士課程・博士課程)、人間発達環境学研究科(修士課程・博士課程)へと、研究大学院として着実に発展してきたことを思うとき、『研究論叢』が、この発展の原動力の一つとして、大学院生の日常的な研究活動を刺激し、研究成果の発表機会を提供してきたことに、重要な意義があった、と考える。

私事で恐縮であるが、『研究論叢』創刊当時は、私自身、自らのテーマを探り、自分を論文執筆に追い込んでいった、若手研究者としての自己形成の課題に直面していた時期と重なる。当時、私は、教育学研究科修士課程修了(学校教育専攻教育計画論、1986(昭和61)年3月)、文化学研究科博士課程単位修得退学(社会文化専攻地域社会論、1992(平成4)年3月)を経て、すでにオーバードクター(神戸商船大学非常勤)であった。

私自身の研究の歩みは、戦後同和教育運動論の狭い枠組を脱しきれず、同和教育の事実が提起してきた課題を、普遍的テーマ「教育の平等」として発展的に受け止める枠組を構築する過程にあって、牛歩のごとくものにと

どまっていた。さぞかし、指導教官(修士課程は齋藤浩志先生(故人)、博士課程は平原春好先生)は、心配されていたことだったと思う。

1991(平成3)年になって、一つの転機が訪れた。アメリカ研究調査旅行(ワシントン、ボストン、ニュー・ヨークをめぐる平原ゼミ旅行)に同行する機会を得たことであった。この研究調査が、以後の博士論文(『教育の平等』論史研究-コモン・スクール改革期の「近代学校教育制度原則」のアンビバレンス-)神戸大学・博ろ・第104号・2006年、主査は土屋基規先生)に結実する、19世紀アメリカ公教育成立と自由黒人の教育要求との関係を解き明かす一次資料群発掘へと、私を誘っていったのである。おかげで、アメリカ近代公教育史のアプローチから(戦後同和教育が提起してきた)「教育の平等」を発展的に受け止める枠組を構築するきっかけになった。

この研究調査旅行の成果をまとめ、それを発表した媒体が、『研究論叢』創刊号であった(拙稿「コモン・スクール改革期の『教育の平等』について-ボストン黒人分離公立学校問題とマンの現実的行動に着目して-)。『研究論叢』は院生紀要であるが、ISSNを付し全国の大学図書館・関係学会組織に送付する研究発表媒体であった。創刊号掲載の拙稿を読んだある他大学研究者から、「19世紀中葉のコモン・スクール改革問題をホーレス・マンの言説と行動の乖離」を軸に論じ、「移民同化政策など実証課題は残るが意欲作」との、叱咤激励のコメント(大崎功雄「西洋教育史の研究動向」教育史学会『日本の教育史学』第37集、272頁、1994年)をいただいたことがあった。こうした出来事も、以後の私の論文執筆への刺激になって、同和教育研究の狭い殻に閉じていた私にとって、(戦後同和教育が提起した)普遍的なテーマ「教育の平

等」に本格的に取り組み、アメリカ研究へと発展的にアプローチするきっかけとなった。事実、博士論文の、第一章、第三章は、『研究論叢』に掲載した部分が初出であった。今思うと、これまでの私自身の研究にとって、『研究論叢』は、非常に重要な媒体であったといえる。

こう思うとき、おそらくは『研究論叢』の

意義とは、私ひとりのみならず、これまでの神戸大学院生及び出身者にとっても、研究成果を発信する媒体として、各自の研究を進展させていく一助になっていったことにあるといえるだろう。これからも『研究論叢』発行が、院生の研究の前進の媒体として、全国の他大学との研究発表・研究交流を進める役割を果たしていくことを、おおいに期待している。